とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	東京都新宿区河田町 3-29
園名	フロンティアキッズ曙橋

１．活動のテーマ

＜テーマ＞

ことば

＜テーマの設定理由＞

新宿区という地域特性から、園児の周囲には外国籍の保護者や友達がいる環境があり、日常生活の中で英語の音や歌に自然と触れる機会が多い。そのため、子どもたちは日本語とは異なる音やリズムに対して興味や好奇心を示す姿が見られている。
また、日頃よりモンテッソーリ教育の一環として、地球儀や世界地図、国旗、さらには各国の文化（生物・乗り物・人々・食文化など）に触れる活動を行っており、子どもたちは文化の違いを実感するとともに、言語がそれぞれの国のアイデンティティの一部であることにも関心を持つようになっている。
さらに、日常的に英語等による挨拶を保育者や外国籍の保護者に対して積極的に行う姿や、外国語（特に英語）の歌やダンスを覚え、子ども同士で楽しむ様子も見られる。
これらの背景から、子どもたちの興味関心を基盤に、言語や文化への理解を深めることを目的として本テーマを設定した。

２．活動スケジュール

月ごとに、子どもたちの興味を元に、テーマを決め、日本語と英語を交え、言葉の違い、表現を体験した。
４月：春、数字、感情を表してみよう
５月：動作を表す言葉、色や形の表現を知る
６月：体の部分の名前、いろんな形の表現を知る
７月：動作を表す言葉、夏の言葉を知る
8 月：夏の言葉と身体の部分の名前を思い出してみよう
9 月：ハロウィーン、健康的な食べ物について知ろう
10 月：ハロウィーン、接続詞（and 等）の使い方知ろう
11 月：秋や野菜・果物の言葉を知る、クリスマスに向けてダンス練習
12 月：クリスマスの言葉を知ろう
　　外国の言葉でダンスと歌の表現を楽しもう
1 月：冬や服についての言葉を知る、気候変動について英語で学んでみる
2 月：冬、動作（動作に関する動詞）に関する言葉を知る
3 月：春、庭に咲く花の言葉を知る

３．探究活動の実践

＜活動の内容＞

４月：様々な表情の写真を見ながらどんな気持ちか英語で現してみたり、春や数字に関する英語を積極的に答えていた。自分の気持ちを聞かれると嬉しそうに happy や Sad など表情豊かに答えていた。
５月：実際に単語を言いながらその動作をしたりみんなで体で表現したりしている。これはなんていうのかな？と先生に実際に見せて教えてもらっている。
６月：写真や自分の身体を指さしながら英語で表現したり、ハートやひし形など難しい形の単語もフラッシュカードなどを見ながら答えている。保育室の中にある同じ形を指さして「Diamond！」などど言っている。
７月：5 月に子どもたちの動作の表現の広がりや疑問がありさらに単語を伝えると難しい単語でも一生懸命発音しようとする姿があった。
8 月：語彙がますます増え、教師の問いかけにもこたえられる子どもたちが増えている。更に応答的な関わりができるように思い出しながらゲームなども取り入れながらレッスンをすると分かることが嬉しい様子がある。
9 月：ハロウィンをワクワク楽しみにしつつ、お菓子だけでなく健康的な食べ物について言語と海外の文化を合わせて学んでいる。特に 10 月にはパレードもあるため歌や本を通してさらにハロウィーンへの期待感をふくらませていた。
10 月：9 月に引き続き大人気のハロウィーンのテーマも楽しみつつ、接続詞（and）の使い方をカードを通してゲーム感覚で学んでいた。ダンスなどもあの曲踊りたい！とリクエストする姿がある。
11 月：身近な野菜や果物、秋の言葉を英語で表現し戸外活動でも「これは sweet potato だね」など散歩先のある八百屋さんで発言している。クリスマスに向けてダンスや歌で海外の文化に触れながら身体での表現を楽しんでいる。
12 月：クリスマス会で日頃歌っている歌やダンスの発表を行ない笑顔で参加する姿があった。クリスマスの言葉は特に身近に感じているようでサンタクロースやツリー、オーナメントなど知っている単語を積極的に発言している。
1 月：冬や服の言葉をフラッシュカードを見てすぐに発音するスピードで勝負するようなゲームをするとカードがもらえるため一生懸命覚えようとする姿があった。年長は気候変動についての言葉など英語で学んでいる。
2 月：1 月に引き続き冬に関する言葉、動作を表す言葉など難しい単語も少しずつ覚えている。前に出てジェスチャーゲームのように動作をしてそれを当てたりするゲームをすると積極的に手を挙げて参加していた。
3 月：一年を通して英語について触れてきて好きな歌や覚えた言葉や表現など振り返ったり、春にまつわる言葉について新たに覚えたりしている。

４．振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

英語は日常的に触れる機会が多いものの、講師との関わりを通して語彙の広がりや品詞への気づきなどが自然に育まれていく子どもたちの姿が印象的であった。特に、単なる言葉の模倣にとどまらず、講師とのやり取りの中で「これは英語で何と言うのか」と自ら問いかけたり、既に知っている単語を組み合わせて表現しようとしたりする様子が見られ、日常生活の一部として英語を主体的に取り入れていく姿が感じられた。

また、週に数回の講師とのコミュニケーションの中で、海外の文化や生活について興味を持ち、「どうして？」「これはどこの国？」といった疑問を自分なりに投げかける姿も見られた。こうしたやり取りを通して、子どもたちは言語だけでなく文化そのものにも関心を広げ、異なる価値観に触れながら自分の世界を広げている様子がうかがえた。

さらに、英語で歌やダンスを楽しむだけでなく、「もっと伝えたい」「違う言い方も知りたい」といった思いから、様々な事柄を英語でどのように表現できるのかを探求する姿も見られた。言語の違いそのものに興味を持ち、日本語との違いを楽しみながら、自分なりに表現しようとする姿は、言葉への主体的な関わりの深まりを示していると感じられた。

日頃から外国籍の人々と関わる環境の中で、子どもたちは文化や言語の違いに自然と触れながら育っている。その中で、自分とは異なる背景を持つ人々に対して関心を持ち、相手を知ろうとする姿勢が育まれていることは非常に意義深い。言語の習得だけでなく、多様性を受け入れる基盤が形成されていることを改めて実感した。

また、1歳児から2歳児においても、講師との関わりの頻度は同様であり、歌や絵カードを用いたプログラムを通して、日本語以外の言語に対する興味を自然に示していた。特に、講師への挨拶を英語で行う姿が見られるようになるなど、日常の中で無理なく英語表現を取り入れている様子がうかがえた。発達段階に応じて、音やリズムを楽しみながら言語に親しむ経験が積み重なっていることが確認できた。

これらのことから、子どもたちは英語という一つの言語を学ぶだけでなく、言語の違いや文化的背景に興味を持ち、自ら表現しようとする力を育んでいることが明らかとなった。今後もこのような環境を活かしながら、子どもたちの探究心や表現力をさらに伸ばしていきたい。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	東京都新宿区河田町
園名	フロンティアキッズ曙橋本園

１．活動のテーマ

＜テーマ＞

自然
（身近な生き物：メダカ）（1歳児）
（プランターで植物の栽培）（2歳児）

＜テーマの設定理由＞

（1 歳児）
４ 月に入園した子どもたちが寂しい気持ちから涙を流すような姿が見られたが、室内で飼っているメダカに興味を持ち、水槽を覗くと落ち着くような姿が見られた。その興味を深められるようにこのテーマをメダカの飼育を子どもたち始めた。
（2歳児）
日常の中で身近な自然に触れる機会を通し、子どもたちが五感を使って素材の変化や特徴に気づき、興味関心を広げていく姿が見られている。自然との関わりを通して主体的な探索や表現へとつな（げ、豊かな感性の育ちを促すことをねらいに本テーマを設定した。

２．活動スケジュール

（1歳児クラスの活動）
4～6月：一緒に餌やりや水替えを行う。
メダカの学校を歌い、振り付けを考える。
メダカのリズム遊び

7～10月：メダカの引っ越し（ビオトープ作り）
魚について興味を広げていく。

メインの活動はビオトープ作り

（2歳児クラスの活動）
4 月～3 月　様々な柑橘系の果物を絞る
5月　購入したプランターに野菜の種を植える
6 月　紫陽花の花びらを摘み、すり鉢で潰して染料に使用したり、押し花にした
8 月・9 月　プランターで育てた野菜を収穫

３．探究活動の実践

＜活動の内容＞

準備した教具 ビオトープ用の睡蓮鉢、餌、砂利、水草、ピッチャー （1歳児） 入園したてで寂しい気持ちから涙を流す子どもが多かったが、金魚を眺めたり、餌やりなどを通して、次第に落ち着いて行ったり、生き物に興味を持っていく姿が見られた。 そこから興味を深められるようにメダカの家づくりを提案し、大きな睡蓮鉢を購入し家づくりを開始した。 子ども達と一緒に下に敷く石を拾って来て洗ったり、家を彩るための水草を探したりした。 散歩先でも「これメダカさんにあげる」と言ってきれいな木の実を探したり、活動後もきれいな石を拾ってはビオトープに足していったりする姿が見られた。 また、泳ぐ様子を真似する子もおり、リズム遊びなどに発展し、遊びも広がっていき、メダカだけでなく魚に興味が移っていった。 （2歳児） 子どもが主体的に自然物に関われるよう、扱いやすく安全性に配慮した素材や道具を用意した。具体的には、手で触れやすい大きさの自然物や、簡単に操作できる絞り器具、すり鉢、すりこぎなどを用意し、五感を使って試したり変化を感じられるようにした。プランターの高さは子どもに合わせ、種を植えたり、水やりをしやすいよう工夫した。 各種自然物「草花　葉　野菜　果実」 プランター　培養土　種子　じょうろ すり鉢　すりこぎ 容器類「ボウル　カップ　トレー等」 押し花用　段ボール

（１歳児クラスの活動の様子）

（2 歳児クラスの活動の様子）

４．振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

（1歳児）

身近にいたメダカをきっかけとして、多様な活動へと展開することができ、子どもの興味や関心を出発点に活動を広げていくことの重要性を改めて実感した。また、担任間で日々の子どもの姿を共有し、活動内容を話し合いながら形にし、記録として残していくことの大切さについても再認識する機会となった。

活動当初は、水槽を叩いたり水に手を入れたりする姿も見られたが、継続的に関わる中で次第にメダカの存在を意識するようになり、「びっくりするよ」「やめてあげよう」といった言葉が子ども同士の中で自然に交わされるようになった。こうした姿から、生き物に対する優しさや思いやりの気持ちが芽生え、1 歳児なりに相手の存在を大切にしようとする姿が育っていることがうかがえた。日々の関わりの積み重ねが、命あるものへの気づきや関心を深めることにつながったと感じられる。

（2歳児）

自然物に繰り返し関わる中で、子どもたちは匂いや感触、色の変化といった五感を通した様々な気づきを得て、「いいにおいがする」「つぶれたね」「色がついた」など、自分なりに感じたことを言葉で表現する姿が多く見られた。また、「もう一回やりたい」と繰り返し試す姿や、「見て」「一緒にやろう」と友だちや保育者に働きかけながら活動を広げていく様子も見られ、主体的に関わろうとする意欲の高まりが感じられた。

さらに、同じ素材であっても関わり方や気づきには個々の違いがあり、それぞれが自分のペースで探索を楽しむ姿が見られた。一方で、素材の扱い方に戸惑ったり、活動の様子を見ていることに安心感を持つ子どももいたことから、今後は一人ひとりの興味や発達段階に応じた関わり方や環境設定の工夫がより重要であると考えられる。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	東京都新宿区河田町
園名	フロンティアキッズ曙橋分園

１．活動のテーマ

＜テーマ＞

自然

＜テーマの設定理由＞

日々の保育の中でモンテッソーリ教育の理念を取り入れており、その中で実際に生物や植物の生長を見守ったり教具に触れたり観察日記などを書く中で子どもたちから自然や植物の成長などへの興味が広がっていると感じたため。

２．活動スケジュール

４月：野菜に触れる、伊藤農園へ種まきに行く
５月：農園で畑作業（水やり、雑草抜き、間引き）、観察
６月：種、苗を植える（年少）、農園で畑作業、観察
７月：朝顔の水やり観察、農園で夏野菜収穫、夏野菜カレーの販売
８月：農園で収穫した枝豆を干す
９月：きなこ作り
１０月：秋冬野菜の種まき
１１月：農園でさつま芋堀、畑作業、種うえ、観察
１２月：農園で畑作業、収穫、観察
１月：農園で冬野菜の収穫、食べ比べ
２月：子どもたちの意見から味付け等考えてクッキング
３月：年長クラス、一年間の振り返り発表

３．探究活動の実践

＜活動の内容＞

年中年長のクラスは伊藤農園へ行って種まきや収穫、水やりや雑草抜きを行うが園の前で身近な花の栽培、成長を見守れるようにした。

毎週子どもたちは畑へ行けない為、職員が畑の整備に行った際に成長を写真に撮り子どもたちに見てもらったり成長を絵にかいたりどのように育てていくかどんな食べ方があるかなど話し合いを持った。

４月：年長が初めて畑へ。アドバイザーさんの話をしっかり聞いて種植えを行う。水をあげながら「大きくなれ～」「美味しくなってね！」と生育を楽しみにしている。水をあげたあとは「明日には収穫できるかな！？」と収穫を待ち望んでいる姿が見られた。年中は再生栽培に挑戦している

５月：年中は初めて畑へ行く。不思議そうに観察したり、虫を怖がったりする様子があったが一生懸命、雑草抜きや水やりをしていた。間引きをした年長からは保育者の「栄養を取り合っちゃうので間引きをします」という言葉から「なんでお野菜同士でけんかするのー？」という声が上がっていた。

６月：年中と年長それぞれで伊藤農園へ。ナスや児玉スイカが順調に成長しており成長を観察しながら水やりや雑草抜きをする。トウモロコシや枝豆も成長していて「早く食べたいな」という声が上がっていた。

夏野菜を使ってどんな料理が作れるか話し合うと、「夏野菜カレー」との声が子どもたちから上がる。夏祭りで自分たちでお店屋さんとしてカレーを売りたいと話し合いから決まる。

年少は朝顔の種や花屋で興味を持った花を植えて育て成長を見守っている。土の感触やみずやりを楽しみにする姿があった。

７月：年中年長でマイクロバスに乗り、伊藤農園へ夏野菜を収穫しに行く。年中は枝豆ととうもろこしを年長はトウモロコシ、ナス、小玉スイカ、枝豆の収穫を行った。立派に育った野菜を見て嬉しそうにしている。園に帰って、皮を剥いたり茹でた枝豆、トウモロコシ、スイカを味見して旬を味わっている。「年少さんにも食べてもらいたいな」「お父さんお母さんにも見せたいね」など声が上がっている。

園で行われた夏祭りで年長を中心に夏野菜カレーの販売を行った。どんなふうに育てたら美味しくなるか、普段食べている野菜を作る大変さ、自分たちの口に入るまでを販売を通して知ることが出来生産者さんたちの大変さを感じている子どももいた。

８月：カレーに使わなかった枝豆を干すと大豆が出来るという保育者の言葉からやってみたい！という声が上がり枝豆を干す活動を行う。

９月：大豆から何を作ろうかという話し合いできなこにしたいとの声があがる。年中と年長ですりこぎで乾いた大豆をすりきなこを作る食育を行った。その日のおやつがきなこおはぎだったため年少も一緒にきなこの味を楽しんだ。砂糖を混ぜることで甘くなっていることを知る子どもたちもいた。

10 月：年中年長で秋冬野菜、3 種類の大根とリーフレタス、はまみなとべかなの種まきをした。終わった後は「大きくなれ～」と言葉を掛けながら種に水をあげている。「今度はどんな味の野菜になるかな」と楽しみにしている。

11 月：年長はさつまいもの収穫として農園を訪れている。頑張って掘っていき、さつまいもの先が見えると「あった！」と言ってすごい勢いで土をかき分けている。大きい芋や変わった形の芋が出てきて喜んでいる。また年中が畑へ。育っていた大根の葉を観察したり、間引きをしている。指で土に穴をあけスナップエンドウも植え、雑草も抜いて「野菜にたくさん栄養が行くように！」と頑張っていた。

４．振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

年中・年長児は、伊藤農園での体験活動と園内での継続的な観察・栽培活動を往還しながら、野菜の成長過程や自然との関わりについて理解を深めていった。毎週畑へ行くことが難しい中でも、職員が撮影した写真をもとに成長の様子を共有したり、絵に描いたり、育て方や食べ方について話し合う機会を設けることで、子どもたちの関心や学びを途切れさせることなく継続できた点は大きな成果であった。

活動の中では、種まきや水やりだけでなく、間引きや雑草抜きといった作業にも取り組んだ。保育者の説明を受けながら、「栄養を取り合ってしまう」という理由で間引きを行う経験は、子どもたちにとって新たな気づきとなり、「どうしてお野菜同士でけんかするの？」といった素朴な疑問へとつながっていた。こうした体験を通して、形の良い美味しい野菜を育てるためには手間や工夫が必要であることを、子どもたちなりに実感していく姿が見られた。また、雑草抜きなどの地道な作業にも意欲的に取り組み、「野菜にたくさん栄養がいくように」と目的を理解しながら関わる様子も印象的であった。

収穫の場面では、自分たちが関わってきた野菜が大きく育っていることに喜びを感じるとともに、その後の調理や試食を通して「育てる→収穫する→食べる」という一連の流れを実感することができた。「年少さんにも食べてもらいたい」「おうちの人にも見せたい」といった言葉からは、達成感や共有したい気持ちが育っていることがうかがえる。さらに、夏祭りでのカレー販売を通して、自分たちの育てた野菜が人に届く経験をしたことで、普段何気なく食べている食材が多くの手間や工夫を経ていることに気づき、生産者への関心や感謝の気持ちを持つ姿も見られた。

また、収穫後の活動も広がりを見せた。枝豆を干して大豆にする、さらにきなこへと加工するなど、食材の変化に着目した食育活動では、「こうすると違う食べ物になる」という発見や驚きがあり、食への理解を深める機会となった。こうした経験を通して、食べ物や自然の大切さについて自分の言葉で語る子どもの姿も見られるようになった。

特に印象的であったのは、普段は野菜が苦手であまり口にしない子どもが、自分たちで育てた野菜に対しては興味を示し、「おいしい」と言って食べる姿であった。野菜がどのように育つのかを一から知り、関わってきた経験が、苦手意識の軽減や克服につながっていることがうかがえる。このことは、体験を通した学びの重要性を改めて示しているといえる。

さらに、活動の中で子どもたちの関心は「育てること」から「食べること」へ、そして「調べること」へと広がっていった。次にどのような野菜を育てたいかを話し合う中で、「こんな料理を作ってみたい」「この野菜はどんな味になるのだろう」といった発言が見られ、料理や食文化への興味も高まっていった。また、似ている形でも名前が異なる野菜や、海外が原産の野菜に関心を持ち、世界地図や図鑑を用いて調べる活動へと発展したことは、子どもたちの探究心の広がりを示している。

最終的には、年長児が調べた内容を年少・年中児に発表する機会を持ち、野菜の原産地や育てる大変さについて自分の言葉で伝える姿が見られた。緊張しながらも発表に取り組む姿からは、自らの経験や学びを他者に伝えようとする意欲の育ちが感じられた。

これらの一連の活動を通して、子どもたちは自然と関わる楽しさだけでなく、野菜を育てる大変さや食べ物の大切さ、さらには人とのつながりや世界への関心へと学びを広げていった。今後もこのような体験を大切にしながら、子どもたちの主体的な学びや探究心をさらに育んでいきたい。